

商品資料館便り

シンポジウム

「商品学と工芸史のはざま」

一橋大学と山口大学の所蔵資料から考える商業教育史」に参加して

商品資料館企画室室長
経営学科准教授

櫻庭 総

二〇一九年十一月八日、一橋大学大学院言語社会研究科主催(山口大学経済学部協力)による表題のシンポジウムが開催された。

主催者の小泉先生は、数年前から一橋大学の商品陳列室・商品標本室の資料整理・研究に尽力しており、その一環として、二〇一九年二月に本学商品資料館も視察されている。そこでの出会いが契機となり、本シンポジウムが実現した。

本シンポは、JAXAからハレパネ(みなさんご存じですか?)まで登場するエスプリの効いた小泉先生の挨拶で幕を開け、当館企画室員の成富敬教授による報告「山口大学商品資料館の現状と課題」、学芸員の宮川智美氏による報告「あいまいな『工芸』の領域と可能性」、小泉先生による報告「一橋大学商品陳列室・商品標本室の概要と高等商業学校のネットワーク」、商品陳列室・商品標本室の資料整理・研究に従事している研究補助員の手塚恵美子氏による報告「高等商業学校商品

見本陳列所の初期コレクション形成が続いた。

最後には登壇者によるパネルディスカッションも行われ、フロアを交えた活発な意見交換がなされ、盛会のうち



寄稿いただいた学芸員の高田瑠美氏も駆けつけてくださった。

たいへん素晴らしい内容であったため、登壇者の方々に「資料館便り」へのご寄稿をお願いし、本号を発行することができた。そのような次第で、各論考からシンポジウム当日の熱気を感じとっていただければ幸いです。

以下、蛇足ながら個人的雑感を記す。

第一に、商品資料館の意義と可能性を感じる事ができた。当館には価値の高いものが眠っているという噂こそ耳にしていたものの、門外漢にはその安らかな寝顔から何も読み取ることができない。まして普段は犯罪や刑罰に関する荒くれた研究に従事しているため、私が商品資料の可能性を見出すなど、Tーレックスが日本の社会保障制度の未来を考えるようなものであった。

ところが、本シンポの宮川報告は、専門的な知見から当館の意義を説得的に論じながら、恐竜の脳みそにも理解可能なほどわかりやすいものであった。とりわけ、本館が陶磁器を「美術品」ではなく「商品」として蒐集していたからこそ、現在の陶芸史における再評価の潮流にピタリと符合するという論旨(だと勝手に解釈しました)には目から鱗が落ちた。

第二に、本シンポに溢れていた活気を感じる事ができた。たしかに、商品資料の保存状態は、一橋よりも山口

に軍配が上がるかもしれない。しかし、一橋は、「モノ」はなくても、それを活かそうとする「人」や「知恵」に満ちていた。

少ない資料からも当時の状況を推測する手塚氏の手法も大いに参考になったし、会場には関東周辺から多くの専門家が集まり、刺激的な意見が飛び交っていた。小泉先生が形成された知のネットワークに触れたことで、当館がガラパゴス状態にあったことを痛感せざるを得ない状況に追い込まれてしまった。

読者の方々にとっても、今回の便りが商品資料館を見直すきっかけとなれば幸いである。



「そこに商品があったから」とまでは言えないけれど

一橋大学

大学院言語社会研究科准教授

小泉 順也

目の前にモノが置かれているときの反応は千差万別である。手に取ってそれが何であるかを確かめる人もいれば、一瞥もせず素通りする人もいる。あるいは、視界に入っても気に留めない人もいるだろう。それが手のひらに乗るくらいの量であれば問題ないが、千の単位で所蔵されているとなると話はまったく別である。

一橋大学には商品陳列室、商品標本室と呼ばれる部屋がある。その歴史は、一八七五年に商法講習所として開所した一橋大学が、東京商業学校と呼ばれていた時代の一八八〇年代後半にさかのぼる。その頃、商品を集めて授業で活用するために商品陳列所が整備された。ただし、その施設の呼称は商品見本陳列所、商品見本陳列場など時代によって異なる。学内資料に初めて施設名が登場してから数年後、所蔵する資料の点数は早くも一万点を超えたとする記録が残されている。しかし、一九二三年の関東大震災により、建物やほぼすべての資料や関連文書は焼失した。その後、資料収集を再開したが、資料の台帳は現存せず、購入記録もほとんど残っていない。それゆえ、正確な数字は把握できていないが、二〇一九年一二月の時点で数千点を優に超える資料の存在は確認されている。かつて本学

には、商品学や商品検査論の授業を担当する専任教員がいたが、二〇〇〇年代に相次いで退職すると、商品資料は文字通り放置されてきた。二〇一二年に私が着任したとき、資料が保管された部屋は積年の埃やカビのにおいで長くは留まれないほどの環境であり、一部の床は腐食のためにたわんだ状態であった。

ここで自己紹介をしておく、私の専門分野はフランス美術史である。とくに一九世紀後半の印象派からナビ派の時代を研究しており、カビ臭い商品資料などとは無縁の生活を送っていた。しかし、着任後は美術史やフランス語の教育に加えて学芸員養成も担当したため、可能な範囲で、商品を含めた学内資料を博物館実習などで活用するように努めてきた。あわせて講演会を開催したり、小さな展覧会を企画したりして、その存在に光を当てる試みを細々と続けてきた。こうした実績が実を結び、学内での認知度が徐々に高まった。その結果として、急な展開であったが、学内の新規プロジェクト「一橋大学商品陳列室・商品標本室の環境整備と資料整理」が二〇一七年から立ち上がった。

これは、私が所属する言語社会研究科、商品資料を管轄する経営管理研究科が協働するかたちで実現したものであった。経費の大半は経営管理研究科が負担し、私に加えて、経営管理研究科助手一名、新たに採用した研究補助員一名が中心になってプロジェクトを進めている。当初は三年間を予定していたが、計画の拡大にともない一年延長し、二〇二二年三月までの継続が決定している。その過程において、底が抜ける可能性のあった床を

含めて、商品陳列室の全面的な改修工事を、二〇一九年九月に終えたことは大きな成果であった。

このようななかで、シンポジウム「商品学と工芸史のはざま―一橋大学と山口大学の所蔵資料から考える商業教育史」が一橋大学で二〇一九年一月八日に開催された。タイムリングとしては、部屋の環境整備に一定の目的がたち、資料の整理と研究に本格的に着手しようとする矢先であった。全体で三五名の参加者があったが、そのなかに首都圏の大学や博物館に勤務する専門家も含まれていた。ここでは、顔を合わせて話をするこの意義を

久しぶりに実感する機会となった。正直なところ、山口大学も一橋大学も程度の差はあれ、膨大な商品資料をどのように活用するのかという同様の悩みを抱えている。こうした現状認識が共有されたとき、ようやく仲間を見つけたような喜びが湧いてきた。登壇者の専門分野は異なり、共通の基盤はほとんどない。本来であれば、商品学や商業教育の歴史を語る資格はなかったのかもしれないが、私が知る範囲では、当該分野の専門家はいないに等しいのである。

振り返ると、私も当初は傍観するつもりで、本件については及び腰であった。それでも、頼みの綱はいつまでも現れず、どこかの段階で自分がやれる範囲で取り組めばよいと気持ちを切り替えた。モノが学内にある以上、何らかの対応が求められる。こうした心構えが生まれたとき、少しずつ歯車は動き始めた。「なぜ資料整理を始めたのか」と問われたならば、「行きがかりで」と答えるくらいで、「そこに商品があったから」などと見栄を切ることはできない。しかし、地道な学内資料の整理を通して、学内の教職員や外部の専門家との新たなネットワークが築かれたのは確かである。今回のシンポジウムをきっかけに、山口大学や大阪東洋陶磁美術館との不思議な縁も生まれた。視界に入っていないようにしても、そこに商品資料は残されている。こうした状況を前に関係者の協力の輪がさらに広がることを期待したい。その先に、商品学や商品資料を歴史的に検証しようとする機運が生まれる可能性はあるだろう。



陶芸史からみた商品資料館

大阪市立

東洋陶磁美術館学芸員

宮川 智美



一橋大学で行われたシンポジウム「商品学と工芸史のはざま―一橋大学と山口大学の所蔵資料から考える商業教育史」(二〇一九年一月八日)に、縁あって参加させていただいた。商品資料館の歴史や商品学についてとり上げる両大学の皆さまのなかで、私の役割は陶芸史の立場から山口大学商品資料館について発言することにあつた。貴館へは、本誌

二二号へ寄稿された高田瑠美氏(菊池寛実記念智美術館)とともに伺つたが、十分な調査も出来ないまま「位置付けと資料の特徴及び意義」を語る失礼をお許しいただきたい。貴館が所蔵する陶磁器は、明治・大正時代に収集されたもので、古陶磁も含まれるが、多くは収集と同時代に制作されたものだろう。陶磁器は日用品であり、産業、デザイン、芸術、欧米では室内調度品としても認識され、様々な領域で論じられてきた。コレクションの位置付けを考える時、まずは近代陶芸がどのように語られてきたのかを振り返る必要がある。

陶芸を含む工芸は、当初美術とは認識されていなかった。日本で初めての官立の美術展は、一九〇七年に始まる文部省美術展覧会(文展)であり、日本画・洋画・彫刻という三部門が設けられている。工芸家の発表の場は、一九一三年に農商務省の主催で始まる図案及

応用作品展があり、のちに商工省に引き継がれ商工省工芸展覧会となる。絵画や彫刻が文部省の管轄なのに対し、工芸には産業としての視点が強かったといえる。これを不服とする工芸作家たちの働きかけもあり、文展から名称を変えた帝国美術院展で、一九二七年に初めて第四部として「美術工芸」の部門が設置された。これは工芸が美術として位置付けられた重要な出来事だと言われ、近代陶芸史はこうして登場した個人作家の陶芸家の作品を中心に論じてきた。

では明治・大正時代は陶芸の空白期なのかと言え、決してそうではない。殖産興業や輸出振興のもと、欧米から窯業技術を学んで設備を近代化し、デザインの改良を政府主導で組織的に行っている。産業としての明治陶芸も含めた陶芸史の見直しは、一九九〇年代から急速に進み、歴史的観点と美的観点から再評価されている。

例えば『ジャパニーズ・デザインの挑戦 産総研に残る試作とコレクション』展(愛知県陶磁資料館、二〇〇九年)では、産業技術総合研究所の所蔵作品を紹介している。所蔵作品とは、京都市陶磁器試験場をはじめ、市立・国立の試験所で作られた試作品と、参考品として収集された一九世紀後半から二〇世紀の陶磁器である。同展でこれらは「産総研に残る試作と参考収集品(コレクション)」とは、近代の日本における陶磁器制作(製陶)に関する科学や技術、デザインについての先端的な研究の膨大な成果」だと認識されている。こうした歴史的観点からの見直しに加え、明治期の輸出工芸は「超絶技巧」というキャッ

チ・フリーズのもと、現在は美的観点からも受け入れられている。

つまり明治・大正時代の陶磁器は、近年陶芸史で研究対象とする意義が見直されており、貴館の資料もこうした動向のもと評価できる。特に商品学の「参考収集品」は、すでに陶芸史が見出した制作側の資料ではなく、需要側からの異なる視点を提供してくれるかもしれない。

こうした位置付けを踏まえて、貴館所蔵資料の特徴と意義を簡単にまとめたい。第一に、実物の資料が残されていること。当たり前には思われるかもしれないが、この時期の作品は

まさに「商品」や「試作」と認識され、保管状態は必ずしも良くない。その中で、貴館の資料は収集の実態をそのまま残す総体としての意義もある。これに加えて個別の作品も、板谷波山や河井寛次郎など、近代陶芸史において重要な作家と関係の深い機関の作品が所蔵されている。個別の作品の意義は、今後周辺資料と関連づけることでより明確になるだろう。

第二に、各資料の収集時の情報が残されていることが挙げられる。商品学という領域の方法であろう、収集年や収集場所、購入額、産地、寄贈者などの記録が残され、その物に対する当時の認識を窺うことができる。

これらの資料をどう生かしてゆくに話を進めた時、残念ながら商品学や経済学という元の文脈においては、もはやあまり活用の余地はないのだろう。しかし文脈を変えると異なる意義が生じ、そのことに気が付くほどに時が経ってしまったことは確かだ。

最も単純な活用法を思いつくまま記せば、学部の枠をこえた博物館実習の場としての利用だろうか。学生が目録を写真付きでデータ化し、テーマを設けて展示を作るなかで各作品の周辺資料を調べ、基礎資料を蓄積することが出来るだろう。幸い、成果を発表する場としての本誌まで揃っている。

もちろん類似する傾向のコレクションを持つ専門機関との連携は有意義である。まずは一橋大学商品陳列室との出会いが、次の展開を導くものになることを期待したい。



利用してもらってこそ

商品資料館企画室

経営学科教授

成富 敬



商品資料館には高さ一〇数センチの人種模様が置いてある。飾ってあるというより置いてある。札には島津製作所。島津と言えば京都の精密機器メーカーであり、「島津源蔵」の名とともに進取の精神にあふれた老舗企業イメージがある。島津製作所製人形の寄贈者として二代目島津源蔵の弟島津源吉氏の名が記されている。幸い現在の商品資料館新営に尽力された第三代商品学担当高取健郎教授が残された目録と現物のおかげで「いつ、どこで、だれが、なぜ」のうち「なぜ」のみが不明である。おそらく明治四四年三月から大正一三年六月まで、山口高等商業学校長の任にあった横地石太郎氏との縁で寄贈されたものであるろう。根拠となる資料が見つかっておらず、「おそらく…であろう」と記さざるを得ない。

明治三八年、山口高等学校は山口高等商業学校への改称と改組がなされ、五月八日、第一回入学式が挙行された。この時期は日露戦争の重要局面にあり、国運を懸けた日本海海戦はわずかその二〇日後のことである。応召し戦地に赴く教官もおり、松本源太郎校長や横地氏にとって取り組まねばならない課題は山積していたはずである。商品資料目録には横地氏寄贈として校長就任直前の明治四四年二月に花瓶、校長離任時の大正



横地石太郎

一三年六月に香炉も記されている。いかなる思いであつたらう。

横地氏は金沢の人である。明治一七年帝国大学で応用化学を学んだ後、神戸師範学校、京都中学校、鹿児島高等中学造士館、福島県尋常中学校長、愛媛県尋常中学校長を経て、明治三三年山口高等学校に着任している。着任までのわずかな期間に『東京人類學會雜誌』第一五巻第一七〇号(明治三三年五月二〇日)に「伊豫國周桑郡吉岡村の古墳」を手はじめに土器、金環、石器に関する六編を上梓している。また明治期日本における人類学の泰斗坪井正五郎氏との交流は『人類学会報告』第一巻第三号(明治十九年四月二四日)の「遠江菅ヶ谷横穴より出でし土器」において試験を横地氏に頼んだ旨の記載により明らかである。また、昭和四年には東亜天文学会の前身である天文同好会の雑誌『天界』に「明治二十年の皆既日蝕を見て」を掲載しており、京都において中心的な役割を果たしていた山本一清、さらには新城新蔵といった天文学分野の人々との交流も想起される。

以上記した事柄は国立国会図書館デジタルコレクションはじめ、盛んに整備が進められ

ている各種デジタルアーカイブを利用し入手した資料を基にしている。当初の「なぜ」に対する芋づる式調査の軸は「横地石太郎」であったが、素人の浅はかさか、自分で面白いと思う脇道へ逸れ、また戻っては逸れを繰り返し、収束は闇のかなたにある。

一橋大学において、歴史的一幕を表す重厚な建築物の中に商品陳列室・商品標本室がよみがえる。山口大学の商品資料館は本学の歴史の一端を具現化したものであり一朝一夕にできるものではない。本学では学術資産継承事業の一環として商品資料のデータベース化が進められている。見方によっては廃棄される運命にある資料は、一度失えば二度と蘇らせることはできない。大学が所有する特許ではないが「利用してもらってこそ」である。新たに戴いた学内外のつながりを広げ、専門家を問わず、一般の人にも気分よく利用してもらってこそ商品資料館の生きる道が開ける。商品資料館へのご支援を期待し本稿を閉じる。



編集後記

中国語に「物尽其用」という四字熟語がありま。その意味は文字のとおり、物の役割を十分に果たすべき、資源を浪費しないということです。

商品資料館には「物」が溢れていて、これらの「物」は旧高商時代や戦後の経済学部の研究・教育に数十年以上に渡って、十分にその役割を果たしてきたと言えるでしょう。

しかし、時代とともに商品学の内容が変わり、商品学という概念を超えて(捨てる)と言ってもよいくらい、色んな分野から、いま商品資料館に収蔵されている沢山の物の「用」を探ることが我々にとって一番の課題になっています。

この時代が与えてくれた「未知」に対して、我々だけではなく、同系の研究教育機関はもろろんのこと、色んな他分野の専門家と連携し、知恵を出し合っていくことが大事だと感じています。

その一例として、「大阪市立東洋陶磁美術館」学芸員の宮川智美さんと「菊池寛実記念智美術館」学芸員の高田瑠美さんが商品資料館に来館され、その調査結果を二〇一九年一月発行の「陶説」(公益社団法人日本陶磁協会)に発表されました。

お二人の論文を拝見すると、いままでも我々が把握していない商品資料館の所蔵品に秘められていた一つの「用」が少し見えてきました。また、この号に掲載している文章を読んでいたと、読者の皆様も連携の大事さを感じていただけないでしょうか。

「商品資料館だより」第一号と同様に、桜が咲く季節の前に皆様に第二号をお届けすることができました。我々はこれからも商品資料館の「物尽其用」の実現に努力していく所存であり、その進展をこの「商品資料館だより」を通じて皆様に届けていきます。(商品資料館企画室・観光政策学科准教授 袁麗暉)

